（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　崔　境眞

インドにおいて論理学研究は長い歴史をもつ。3〜4 世紀にはニヤーヤ（論理）学派が論理学を組織的に大成し、一方また 5〜6 世紀に活躍したディグナーガ（陳那）は、初期の大乗仏典に含まれる論理学説をもふまえ、仏教論理学を基礎づけた。さらに、ディグナーガ論理学をめぐる仏教内外の論争を念頭に置き、仏教論理学を確立したのが 7 世紀のダルマキールティ（法称）である。ダルマキールティの論理学の影響はその後のインド仏教、さらには 10 世紀後半以降の後伝期のチベット仏教においても顕著であった。

ただし、資料的な制約もあって、従来のチベット仏教論理学の研究は、主にサキャ派系（13 世紀以降）、およびゲルク派系（14 世紀後半以降）の研究が中心となり、11 世紀から 12 世紀に至るカダム派系の本格的な論理学研究は困難と見なされていた。しかし 2006 年から刊行が始まったカダム派全書は、この状況を一変することになった。そこには後伝期のゴク・ロデンシェーラプ（1059-1109）やチャパ・チューキセンゲ（1109-1169）に代表されるカダム派・サンプ学問寺系の諸論師の数多くの著作が含まれていたのである。

本論文はこの新出資料を活用しながら、ダルマキールティ著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ（認識手段確定論）』(PVin)の刹那滅論証が、いかにチベットの、とくにサンプ学問寺系統の諸論師によって理解され、新たな解釈をもたらしたかを考察する。伝統的な刹那滅論証を「所作性に基づく推論」「無因消滅論」「存在性（＝効果的作用能力）に基づく推論」「拒斥論証（＝背理法）」の 4 つの論証に整理した上で、とくに無因消滅論と拒斥論証をいかに関係づけるかという視点から、諸論師の解釈を比較考察する。

本論の第 1 部・序章は、研究の背景と研究史を総括した上で、本論文の目的と方法を明示する。第 1 章では、ロデンシェーラプからプトゥン・リンチェンドゥプ(1290-1364)に至るサンプ学問寺系の 7 名の代表的な学僧の解釈を分析する。第 2 章は、ツォンカパ(1357-1419)が創始したゲルク派の論理学文献に見られる発展的な解釈を、とくにダルマリンチェン(1364-1432)に焦点を当てて分析する。両章の考察により本論文は、無因消滅論と拒斥論証の意味づけという視点から、カダム派からゲルク派に至る諸論師の論理学説には、3 つに類別される刹那滅論証解釈が確認されるという結論を導く。第 2 部「付録」として置かれた PVin に対するチャパ・チューキセンゲの注釈『般若の光』は、新出のカダム派全書を底本にした校訂本と訳注で、国内外を問わず初めての本格的な研究成果である。

以上のように、チベット仏教思想史における刹那滅論証の特質と展開を、新出資料を駆使しながら広い視野から考察した本論文の成果は高く評価される。インドにおける仏教論理学説との関連について、いくつかの課題は残されるものの、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに相応しい業績であると判断する。